

掃け、薪を持つて来い、まあ何と云ふ怠け小僧だらう！」と云つては苦しめるのだ、而已ならず時にはヂツクの横面を撲り又は箒の柄で打つたりする、斯の如き事が屢あるので此家の小さい娘のアリスと謂ふのが之を憐み「もつと之から親切にしないと御前を内に置かないよ」と叱つた、此御蔭でヂツクは以前程は虐待されなかつたが、と謂つて決して其心配がなくなつた譯ではないのである、夫は彼の寢室は他とすつと離れた一番高い所にあつて、室と云ふも名ばかり床や壁は一面に穴があつて晩になると其穴から鼠がやつて来てはヂツクを苦め到底眠る所の騒ぎではないのだ、所が或日一紳士の靴を磨いた禮としてヂツクに一ペンスの錢を呉れた、彼は此金を以て猫を買はんこ考へたのである、すると翌日道で一人の娘の子が猫を抱いて歩いて居るのに出合つたから彼は一ペンスで其猫を買つて呉れと頼むだ、すると娘は早速承知して「此猫はよく鼠を捕ります」と謂つて夫をヂツクに渡した

to box one's ears 撲る。

to turned off=to drive away にして追ひ出す。

by any means 決して。

made up his mind=determined

the very next morning の very は意味を強めたるもの。

ヂツクは之を持って家に販り、自分の室に隠して置き毎日自分の食物の一部を割いて之に與へて居つた、之がため暫らくにして一疋の鼠も居なくなり安々と眠る事が出来る様になつた

冒 険

其後暫くしてフィツズワレン氏ノ持船が將に出發せんとし此船には外國に持參して賣る品が澤山積むであつた、フィツズワレンは此機を利用して雇人共にも金儲けをさしてやるふと思つて皆の者を部屋に呼び、何か品物を船に積込んではどうかと尋ねた、之を聞いた皆の者は各種のものを積まんと云つたが唯一人憐むべきヂツクは賣る可き物とては一つもなく又買ふ金すら持ち居らないのだから主人の室に行かず臺所に止つて居た、娘のアリスは何故にヂツクが出で来ないかを知り父に向つて「ヂツクも亦此機會を利用したいのでせう此に私は金がありますから之でヂツクに何か買つてやつて下さい」と願つて父は

sleep soundly は熟眠する。

「否、ヂックはヂックで自分のものを出さねばいけない」と聲高く「ヂックよ御前は船で何を送らふと思ふ」と聞くにヂックは此室に來りて「私は何一つ持つて居りませんが唯以前私が一ペンスで買った猫が有ます」と謂つた、すると主人公は「其猫を持つて來いとして夫を船に積むで見よ又どんな利益があるまいものでもない」するとヂックは目に涙を湛わつつ猫を船に持ち來り之を船長に渡した、人々は皆之を見て笑つたが獨りアリス嬢はヂックは猫が居らねば嘸難澁するだらふと憐んで別に又猫を買ふ金を彼に與へた

其後彼の意志悪い料理人は彼を以前にも倍して虐待し彼を嘲けるに猫を海に送るを以てし「御前は彼の猫が御前を叩く棒切れを買ふ丈の價に賣れるかと思ふか」と謂つた

ヂックは遂に料理人の嘲罵に堪はず、再び故里に歸らんと決心し十一月一日(祭日)の未明に主家を立ち出でホローウエーと云ふ所まで來

りとある石の上に腰を下ろした、此石は今日でもウキツチングトンス

トーンと呼ばれて居る、彼は石に坐し悄然として何れの道に進むべき

やと思案に暮れて居つた。すると丁度遙か彼方の村—教會の鐘の音が

如何にも楽しそうに鳴るを聞き耳を澄まして聞くと

ウキツチントンよ立歸れ。

三度ロンドン市長たる可きものよ。

立歸れ。

と謂ふ如く聞きなされた

「ヨシ—我は如何なる苦痛を忍むでも成人の後大都市ロンドンの市長となり、立派なる馬車に乗らう、我心既に決せり、我は再び主家に歸り、彼の意志悪き料理人をして飽くまでも嘲罵させやう」と獨語しつつ、再び都に立歸り、まだ料理人が二階から下りて來り朝飯の仕度に取り掛つて居らぬ内に臺所に入り自分の仕事に掛つた

put up=stand にして堪え忍ぶ。
Lord mayor of london, ろんごん市長。

Dick ought to have a chance の ought が desire を表すものにして dick されても此機會を利用したいだる—。
made fun of はからかふ。
could not stand の stand は堪ゆるの意。

猫

フキツズローレンの船は長途の航海の後終に外或國に着した、此の國の人民は未だ以前一人の白人も見つた事が無かつたので、珍らしがつて那集して此の船に積んである荷物を買はんとて出て来た、が然し船長の目的とする所は國王に荷物を賣らんとするのだから此の旨を國王に報じたので程無く國王から使者が来て彼に王宮へ来る様にと命じた、そこで船長は命に従つて王宮へ来ると立派な室へ案内され金銀を以て花の形を表はした美しい毛氈の上に坐すと、王及び女王は其より遠からぬ處に坐を占め御馳走をもつた皿を澤山持つて来て船長を饗應するのであつた

ところが王様始め皆の人が未だ其れを食べ始めもせぬ内に多數の鼠が突喚して来て人々が此れを防ぐ間も有らばこそ、見る内に其れを悉く食べてしまつたのである、船長は驚いて王様に「斯様に澤山鼠が有つ

Could get rid of ば免れる。

てはさを御困りで御坐りましょう」と尋ねたすると王様は「如何にも誠に困るのだ、若し鼠を追ひ拂つてしまつて再び来ない様にするものがある有つたら私の寶物の半分を與へても惜しく無い」と云つたので船長は躍り上る程喜んだ、屈究なのはウキツチントネが船長に預けた猫である船長は王様に自分の船にある小さい動物はよく鼠を追ひ拂ふ事が出来ること話したので王様は餘りの喜しさに高く跳り上つて、其の爲めに其の被つて居る帽子は落ちてしまつた、此の王様は喜ぶ事の有る毎に飛び上るのが癖である

王様は「早く其れを連れて来い、若しお前の云ふ事が誠ならばお前の船に黄金を満載してやらう」と云つた、そこで船長は船へ歸へつて猫を取りに行つた其の間に王様と女王とは至急に其上の御馳走の用意をせよと命じた、程無く船長は猫を腕に抱いて王宮へ来た、其時鼠は食卓の所へ群を成して居つたが猫は此れを見ると忽ち其中へ飛込んで

Just in time 丁度間に合ふ。

彼等を追ひ廻はし遂に彼等の多くは床の上に死體となつて横はり残る者は皆自分の巢へ逃げ込むでしまつて再び出て來なかつた

王様は此れを見て非常に喜び、女王も又此の不思議な藝をする動物を自分の許へつれて來る様にと船長に請ふた、船長はブツシイ、ブツシイと呼ぶと猫は直ぐに飛んで來たので其れを取上げて女王の前へ捧げた、然し女王は始めの程は恐しがつて手を觸れなかつたが船長は猫の脊をたたきながらブツシイ、ブツシイと呼んで見せたので女王は始めて恐るゝ手を觸れたが、英語を知らないのでブツチー、ブツチーとしか云ふ事が出來無かつた、すると船長は猫を女王の膝の上に乗せると猫は暫くは鳴いて居つたが程なく眠つてしまつた

王様は今猫を無二の寶物と思ひ込み直ちに船に積んで來た荷物を悉く買つた上猫の代價として荷物の代價の十倍も船長に與へたので船長は大きに喜んで王及び女王に別れを告げ翌日英國へ向けて出帆した

好 運

或る朝フィッツワレン氏は事務室の机に掛つて居つた時に誰れか戸を軽く叩くので氏は「誰れか」と問ふと「貴君の船のユニコーン丸の事を知らしに來ましたと答へた

氏は急いで戸を開くと其處には彼の船長が船荷證券を片手に、外の片手には寶石を入れた箱を持って立つて居つたので氏は喜びの餘り目を上げて天に感謝した

船長は氏に猫の話をして、王及び女王が其の代價としてデックに與へた立派なる贈物を渡した氏は是を聞いて直ちに召使を呼び、「大きな聲を上げて彼れを呼んで來て此の話を聞いてやれ、彼をウキツチントン君と呼ばねばいかん」

其時氏の傍に立つてる人の中にはかゝる莫大なものをあんな小僧にやる必要はないと言ふ人も有つた氏は之れを聞いて「其れは當然彼れの

bill of lading は船荷證券。
as soon as は否や。

The king had never been so glad in his life 王の一生涯中是程嬉しい事がなかつた。

所有に属するものであるから自分は彼れより一文も受ける事は出来ぬ」と云つた此の時デックは恰も器物を掃除して居つた時で有つたが主人の室へ来いと云はれて「私は斯様に汚れて居るし靴は泥だらけだからこても行けません」と云つたが無理矢理につれてこられた、するとフィッツワレン氏はデックの爲めに椅子を命じたので彼れは自分からかはれて居るのだと思つて「ごーか御たはむれなさらずに私の仕事をさして下さい」と云つた

此の時氏は儼然として「フィッツワレンさん之は決して戯れでは有りません、實は船長が貴君の猫を賣つて其の代價として莫大な富を持て來ましたのです」と云ふて氏は寶石の箱を開いてデックに其れを見せた、デックは夢かと許り驚いて、其の一部を氏が取らん事を請ふたが氏は斷然之れを受けず「夫れは悉く貴君の所有であります、而して貴君が夫を有用なものに使ふたらふと信じます」そこでデックは寶石の

he was told to make haste 急がし立てられる。
won play trick の wont は would not の異字にして子供に悪戯をしてはいけません。
I feel sure=I believe にして信する。

内若干をフィッツワレン氏の夫人及娘のアリスに與へたので兩人は彼れに厚く禮を云ひ又其の幸運を祝して其の富を自ら所有せん事を望んだ

然し彼れは決して己れ一人此の富を有するを願はず船長及び水夫等にも夫々澤山の禮をなし尙フィッツワレン氏の雇人達にも皆其の幸福を分ち、彼の意志悪き料理人にも他の者と平等に其れを分け與へた斯くして後フィッツワレン氏は其の汚れたる顔を洗ひ髪を梳り立派な衣服を着したので今は全く見違へる程立派な若者とはなつた

後年ロンドン第一の寺院で立派な結婚式が行はれてアリス嬢はリチャードフィッツワレン氏の妻となつた、此の結婚の席には市長、大法官を始め市内の紳士富豪が多數出席して新夫新郎の幸福を祝したのであつた

其後フィッツワレン氏は大商人となり、ロンドン市第一流の人として

Remembered the cross old cook 意地悪るの料理人にも分配するのを忘れなかつた。

諸人の尊敬を受け、三度ロンドンの市長となり、國王は彼れに勳爵士の稱號を與へたのである

彼れは又有名なるロンドンでニューゲートの牢屋を作つた此のニューゲートの前の圓天井に彼れ及び其の猫の石像が有るが此石像は今に至る迄で三百年間ロンドン見物に来る人の必ず見る所となつて居る

第四十七章

カサビアンカ

今は昔。大海戦有つて聞ゆるものは只だ般々たる砲聲のみ、空は黒烟を以て蔽はれ海は碎れたるマストや木林を以て滿ち死傷者の數は實に夥しいものであつた

旗艦は火災を起し火焰は艦の下部より盛に吐き出し甲板は火を以て蔽はれて居る、九死に一生を得し人は皆小形のボートを下し先を争さう

many more は死者よりもつゝ多數の人が。

て之れに乗り移り、漕ぎ去つてしまつた、今此の燃えて居る艦上に止るのは實に危険である艦の底には火薬が在るから此の危険の中に在つて、艦長カサビアンカの子のみ獨り甲板上に立つて居る、炎は此の時既に彼れの周圍を包んだが彼れは依然として不動の姿勢を取つて居る、戦争開始の時彼の父は彼れに其處に立つて居る事を命じたのである、彼れは常に父の命に順ひ父の言葉に信賴して居るので、去る可き時が來たら父が彼れに命ずるだろうと信じて居つたのだ

始め彼は他の人々がボートへ飛び乗つた時彼も來る様にと呼ぶのを聞いたが彼は是に従はずして我父が我に命ずるの時我は此處を去る可し」と彼は云つた、而して今や火炎はマストに移り帆は全く化して火となり、彼の頬に迫り彼の髪を焼き前後左右皆之れ一面の焰となつた彼れは叫んで曰く「父よ未だ去る可らざるか人々は皆已に去れり、我等も亦去る時には非ざるか」彼れは其の父が戦争開始の當時、敵彈に

when the right time came の when は if と同意にして時が來れば……。

當つて戦死し下の船室内に倒れて居る事を知らぬのである、彼れは父よりの答を得んと耳を傾けた「父よ更に高聲に語れ、然らざれば聞く能はず」怒號する火炎、長檣の落ちて碎ける音、砲彈の響の中に彼れは仄かに父の聲の來るを思ひ喘へぎつ「父よ我は此處に在り、今一度語れ」と此の時、忽ち火炎天に押し黒烟朦々として空を散ひ百雷一時に落つるが如き響あり大氣此れが爲めに震動し、天地爲めに暗し火炎に包まれし船は今其の形だも留めずして粉碎せり正に此れ火薬の爆發したのである

其後幾星霜を経てヘマン夫人なる人此の勇敢なる小兒カサビアンカを歌ふ詩を作つた、此の詩は元より傑作と稱する價值を有せぬが、世人之れを愛讀して能く記憶して居る讀者諸君も又他日之れを讀むの機會に會せん、左に其の一節を掲ぐ

焰渦卷く、船の上に。彼のみは、逃れで立てり。

兵火凄まじ、死の陰舞ふよ。されど勇々しく彼は立てり。

暴風をすぶる神の子かも、猛き血潮は面にぞ似ぬ……

第四十八章

アントニオ、カノーバ

昔、伊太利にアントニオ、カノーバと云ふ小供が有つた、彼は父を失なつたので祖父と共に住居つた、此の祖父と云ふのは赤貧洗ふが如くで石切を業として居つた

アントニオは身體が極めて薄弱であつて、町の子供達と共に遊ぶ事を好まず、常に祖父と共に石切場へ行き祖父が仕事をして居る間石屑の散布して居る中で遊び土を粘ねて種々のものを造り或は槌などを以て石材の一片をとつて種々の細工をして居た、而して其の細工極めて巧妙であつたから祖父は喜んで曰く「此の兒は行々立派な塑造家たらん」

a good many years ago=once upon a time さ同しく昔しの昔。
did not care to play 遊ばんせせず。
as well as は並びに。

Boom 艦内の火薬庫の爆發せる響。

learned it by heart は暗誦する。

it began in this way それはこゝ云ふのだ。

though childish form 姿は子供であるが。

夕方仕事を終へて祖父と共に家に歸れば祖母は彼れを膝に上せ歌を唄ひ又は種々の物語りをするを常とした、翌日は仕事場に行き祖母より聞ける物語中に有る種々なる者の模型を造り以て自ら楽しんで居た、此の同じ町にカウンントと呼ぶ富有な人が住んで居つた、此の人は屢々大宴會を催してその知己朋友を招く事がある、アントニオの祖父は料理法に精通して居るので、宴會の時には必ず手傳に行つたのだ、或日の事此のカウンントの家で宴會が有るのでアントニオも祖父と共に手傳いに行つた、然しアントニオは未だ幼いので手傳ふと云ふても皿や器物を洗ふ位に過ぎないのだが中々うま戯ら者である代りに随分役にも立つたのだ。

萬事好都合に行つて、準備も畧ば整ふたので此れから食事を出すと云ふ時になつた、時忽ち料理室の方に物の碎れる音がしたと思ふ内一人の男が手に大理石の碎けた一片を以て臺所の方へ馳けて來たが、見

some day は未來。one day は過去に用ゆ。

れば其男は色が蒼白に成り、身體は震へて居つた。

其の男が云ふのに「何うしたらよいだろう、私は食卓の眞中へ置く筈の模型を碎した、あれが無ければ食卓を立派に見せる事が出来無い」此れを聞いて雇人一同も非常に心配をした此の食卓が立派に整へられて無いと御馳走も遂に何んの價值も無くなつてしまふのだに今此れを飾る唯一の物を破碎したのだから皆が心配するも實は無理は無いのだ、あゝ此れを聞いたら定めしカウンントが怒るだらう！

「如何したらよいだろう」と彼等一同額を集めて相談した此の時アントニオは其の仕事を止めて、其の人の所へ來て「若し他に之れに代りが有つたら別に心配する事も無いでしょう」と云ふた。すると其の人は「其れは無論の事である、が然し寸分違はぬもので無ければいけないのだ」と云ふ。アントニオが「如何でしょうー私に其れを造らして下

wait on the table はお給仕をするには少しく年がいかない。
All went well 何事もなく済んだ。好都合にやれた。
after all 結局。

「さいますか多分其の位の事は出来るだろうと思ひますから」と云ふのを聞いて其の人は笑つて「馬鹿な事を云ふな御前の様な小供がごして僅か一時間許りの内に模型を造る事が出来るか」と云ふたするとアントニオを知つて居る一人の雇人が兎に角此の小供の云ふ通りやらし「見よじや無いか」と云ので他に詮方も無いから先づアントニオの云ふが儘にさした。

此の臺所のテーブルの上に今牛酪屋から持つて来た出来たての二百斤許の大きな黄色のバタの塊が乗せてあつた、此れを見てアントニオは片手にナイフを持ち其れを切り取つて細工を始めた數分間たつと彼れは其れを以て躡まれるライオンの像を造らへたのである、此れを見て居つた雇人は皆一同に其の立派に出来たのを見て、賞めて曰く「此れは前の碎れた模型よりは遙かに立派だ」と云つた、そこで其の人は非常に喜んで其れを食卓へ飾り付けて云ふた「此れは思つたよりも立派に

nonsense, who are you that you.....「一時間位で模型が出来ると思ふか馬鹿。
nothing else could be done 「さして仕方もないから。
the table will be handsomer by half——「自分が思つたよりも立派だ。」

出来た」と

此の家の主人カウント及び客が皆食事をせんと食堂へ入つて来た時人々が先づ第一に目を留めたのはアントニオの造つた獅子である皆之れを見て驚いて聲を放つて「是れは實に立派なものだ、斯様なものは到底大彫工に非らざれば造る事が出来無い、そして又牛酪を以て造るとは不思議だ」と口々に云ふて主人に此の大彫工の名前を尋ねた、するとカウントが「吾が友よ、驚きは余と雖も君等に劣らぬ此れには何にか理由があるう」と云ふて、雇人の頭のを呼んで如何にして斯る驚く可き彫刻を得たかと問ふたすると其れは實は臺所に居る小供が暫しの間造つたもので有りますと云ふ答を聞いた人々は更に其の驚きを大きくしたのだ、そこでカウントは其の小供を呼ぶ様に命じた。アントニオは此の室へ來るとカウントが「お前は非常なる大彫刻家の作として恥かしからぬものを造つた一體お前の名は何ん」と云ふか又お

this is as much of a surprise to me as to you 私も汝の様に實は驚いて居るのです。

前の師は誰れか」と尋ねたのでアントニオは私の名はアントニオカノ
ーバと云ます、別に師としては石切りを職とする祖父より外に有りませ
ん」と云ふた、此の時此處へ集まつた客の中には有名なる彫刻家も居
つて此の小供は天才で有ると云ふ事を知り、アントニオを賞して止ま
ず、食卓に就く時彼等は此の小兒と坐を共にするを無上の名譽とし彼
れの爲めに此の場で祝盃を上げた。

其の翌日よりカウントはアントニオを家に住はし其の當時國中第一流
の聞ある彫刻家を雇ふて、アントニオの師となし以て彫工を彼れに
習はせた、依つて彼れは更に幾段の熟練を増し今は牛酪で彫刻する要
も無く立派なる大理石を刻み、數年の後アントニオカノバの名は世界
有數の彫刻家の一人として其の名を知らるるに至つたのである。

nothing—but, の but は除きてはの意。
as though—as if

第四十九章

ピシラ

昔。或紳士が佛國の牢獄に囚はれて居つた此の人の名はチャルニイ
と云ふて誠に不幸な人であつて、罪無くして獄舎の人となり、今や世
界廣しと雖も彼の身を思ふものは一人もないのである、彼れは讀まん
とするも一冊の書物だに無く又、紙、筆の類の使用をも禁せられて居
るを以て書く事も出来無いのだ、故に何一とつその心身を樂ますもの
が無いので、今の身の上で唯一つ彼れの樂とするのは石を疊んだ牢内
や庭を散歩する事である。

或る春の朝チャルニイは例の如く散歩をして所在なしに常の如く敷石
の敷をかぞゑて居つた、が急に彼れは立止まつた、それは石と石との
間に何にか種が落ちて、其れが芽を出し今や地上より小さい嫩葉を出

Shut up 禁錮された。

して居たのだ、彼れは其を足下に踏まふとしかが見れば其の葉を薄い蔽が包んで居るのを見て、彼れは「此の蔽が有ればこそ葉が安全であるのだ、此れを踏まない様にしてやろう」と云ふて歩み去つた。

翌日散歩の時彼は昨日の植物の事を思ひ出す前に危ふく之れを踏みかけた。

其れを見ると今日は葉が二つになり、昨日よりもずつと大きく成つて居るので彼は長い間其の傍に立つて其れをつくく眺めて居た。其後毎朝彼は一度は必ず此の小さい木の所へ行つては其の木が寒さの爲め又は日光の爲めに枯れはしまいか、何れ程迄成長するだろうかを見るを楽しみとした。

或る日の事である彼は窓から外を眺めて居ると牢の番人が庭を通つて倒の木の上を通つて無慘にも木を踏んだ様に見えたので彼は驚いて叫んで「をー我が大事なピシオラー！」と叫んで全身を慄わせた。

牢番が食事を以て来た時に彼は闇魔顔の牢番に彼の小さい木を害せぬ様にと頼んだ、彼は始めは牢番なご云ふ者は無慈悲なものだと思つて居つたが牢番こそして居れば中々親切氣の有る男と見えて答へて、云ふのに「貴君は私しが夫の木を害すると思ひなさるか若し私が貴君の其の木を大事にする事を知つて居らなかつたならばずつと以前に夫れは私しに踏まれて死んであつたらう」此れを聞いてチャルニは牢番の親切を謝して自分が牢番を悪く考へた事を深く心に恥じたのだ。彼れは此の木をピシヲラと名付けて毎日眺めて居つた。其れは毎日に成長して来たが一日牢番の飼つて有る犬に踏まれ折れた、彼れは深く此れを悲んで「此れはピシヲラの爲めに家を造らるてやらねばならぬ」と云ふて夜が寒いので毎晩與られる薪の内少しづつを取つて此れを以て彼は木の爲めに家を造つてやつたのだ。

こー云ふ風に彼は此木を非常に大事にして手を換ひ品を換ひ實に注

picciola must have a house. ピシカラも家かなければならぬ。

The day before 昨日。

from head to foot 全身が。

Thought of=thought about,

意に注意を加へて居たのだ、彼は常に其木が太陽の方向に曲る事も亦暴風雨が来る前には其花辨を重ね合はして居る様な事まで知つたのである、彼は以前にこんな事は思はなんだが花咲き亂れて居る花圃はよく見に行つた事がある。

或る日彼れは煤と水を以てインキを作り、紙の代りにハンカチーフを擴げ、捧切れを削つてペンとし、此の小さい植物の歴史を書かうと決心し終日其れが爲めに費やした。「お、又お二人で！」と牢番は彼が此木の傍に立つ時は、云ふのを常としたのである。

既にして夏も過ぎビシヲラは日を追ふて愛らしくなつて来て今や、井以上の花を有する様になつた、

所が或る朝ビシヲラは垂れ始めたのでチャルニーは驚いて、水を與へたりなにかした何等の効無く益々萎れて來、加ふるに葉は凋びだした、是は敷石がある爲めに木は生存する事が出来無いのだ、此際此木

for a pen は pen の代りに。
did not know what to do なす所を知らず。
my lord and my lady チャルニーを lord 花は女性なればビシヲラを lady
と牢番の洒落を云ふたのである。

を救ふの策は唯一つ有るのみだ、即ち其の方法は石を取りのけるに有る。

然し此の事たる牢番如きがなす事が出来無いのであつて、高位高官の人の力で始めて成す事が出来るのみである。

憐む可しチャルニーは此れが爲めに終夜安眠する能はず花は既に凋れ葉も又將に枝より落ちんとするのだ。

此時彼は始めて一策を思ひ浮べた、其れは皇帝ナポレン其人に直接に此の事を請ふのである。

然し是は彼に取つては苦痛な事である。即ち彼が憎む所の者即ち彼れをして斯く幽愁の人と成らしめた當の對平に請ふのであるからである。然し彼はビシヲラの爲めに一切是等の事を捨てて其れをなした。

彼れは其のハンカチーフに一切の事を誌るして此れを、ナポレオンに致さん事を一少女に託した、然れど此の木の生命果して數日を保つや

gave it into the care of a young girl 若き女の子に頼むだ。

否やは疑問である。

ナポレオンの所へ此れを持って行くのも随分長い道中であつたが此れを待つて居る、チャルニーとビシヲラに取つても實に心配の時間では有つた。

然れどもチャルニーの苦心空しからず、皇帝よりの返事が来て石を取のける事が許可されたのでビシヲラは終に其の命を全うした。

其後ナポレオン皇后が此の話を聞き、又ハンカチーフに記せる物語りを讀んで、深く感じ皇帝に向つて云ふのに「斯くの如き善人を獄屋につなぐのは悪事である」とて其の罪の赦されん事を願つたので終にチャルニーは許される事と成つて其の後幸福に世を送つた、彼は又神が自分の身と小さい木を恵まれ又如何なる人心にも親切と誠意が存するを知つてビシヲラを終生忘る可からざる無二の友として育てた、

第五十章

ミーニオン

私が昔の名高い本で讀んだ記憶のあるミーニオンの話と云ふのがあ
る、

* * * * *

ウイルヘルムと呼ぶ若い男が或町の宿屋に滞在して居つたが、或日のこと二階に上ろうとすると、折しも降り来る小さい娘に出逢つた、其の女の兒の頭に若し漆黒の長い捲毛がなかつたなら或は男の兒と見誤つたかも知れない、娘が走り過ぐる時に彼れは之を兩の腕に抱き止めて、一體貴方は誰れの御子かと尋ねた、彼れは此娘をば今し此宿に來た戯繩者の一人だと確信したのである、娘は峻しい、いやな顔をして彼の腕から遁れ何にも云はずに馳せ去つた。

rope-dancers は戯繩者即ち繩を以て種々の藝をする人

これから再び兩人が出合つた時に彼は娘に話した、優しく
ウ「そんなに私を怖れないでもよいよ名前は何と？」

と云ふと小供は

小「皆がミーニオンと呼んで居ります」

ウ「年はいくつかね」

小「誰も知らないのよ」

ウイルヘルムは其儘立ち去つた、然しどうしても此子供の事が氣にな
つて、其黒い瞳や可笑しい態度を不審つた。

其後間もなく或日のこと戯繩者を見物する群集の中に只ならぬ叫び聲
がした、ウイルヘルムは何だろうと思つて出て見ると繩戯者の親方が
杖で以てミーニオンを握つて居たのだ、早速馳て寄つて襟頭むすこびを捕へて
其男を留めた。

ウ「小供を離せ、若しか此娘に觸さわらうものなら、おれ達は此場所を

could not help 禁する能はず。
tried to get loose 放せ放せと闘いた。

動きやしないぞ」

男は免れようと試みたけれど、ウイルヘルムはシツカリ掴んで居る、
其間に少女はすり脱けて群集の中に身を隠した。

男「彼娘の衣裳代を出したら

御前がああ娘を連れて行つてよい」

男はこう叫んだ。

萬事納まつてからウイルヘルムはミーニオンを探した、もう、ミー
ニオンは彼れに屬して居るのである、然し目付からない、戯繩者の一
行が其の町を去つてから漸く目付けた。

ウ「何所にゐたの」

親切に尋ねるけれど少女は何とも云はない。

ウ「さあこれからは私と一所になるんだ、一つ好い子にならなくち

や……」

「ミ」そうします。」

これからミニーオンはウイルヘルムや其友人の爲に出来得る限り盡した、自分以外に誰だつてウイルヘルムに侍らしはしない、嘗て戯繩者が彼女の頬を染めた赤い色を落すまで、水際に赴く彼女を見た。

其れが爲めに彼女は美しさが加はり目を追ふて愛らしくなつた。

彼女は二階を上り下りするに歩くこと云ふ事は無くして躍り上つたり躍り下つたりするのだ又、階段を一足に跳り上つてしまふので目に止まらぬ早業である。

ミニーオンは又人によつてももの云ひ振りが全く違つて居つて、ウイルヘルムに云ふ時には腕組みをして云ふのだ、又終日一言も口を聞かないで、ウイルヘルムに侍して居る事もある。

或る晩の事ウイルヘルムが大變疲れて、悲そうな様子で歸つて来たミニーオンは二階の彼の室へ燈を以て来て、テーブルの上に其れを置い

she would let no one... -は自身でウイルヘルムの用を辨じて他人に任さない
her arms crossed upon her breast 腕を組む。

て、彼れを慰め様とて「ダンスでもしましよーか」と云ふた、ウイルヘルムは喜んで彼女にダンスを命じた。

そこでミニーオンは小さい布物を以て来て床の上に其れを擴げ、部屋の隅々に燭臺を置き、澤山の鶏卵を布物の上に置いて、其れを順序よくならべ、傍にヴァキオリンを以て居つた人と呼んだミニーオンは斯くして後、布を以て自分の目を隠してダンスを始めた。

其のダンスの巧妙で、且つ其の動作の敏捷なる事實に驚く許りで有つて、其の卵の間を自由自在に跳ね廻つて傍で見居ると其卵が潰れたかと危ぶまれる許りであるが、潰れる所かミニーオンは卵に觸れもしないのだ、又卵は少しも動いて其の位置を換ると云ふ事も無い。

ウイルヘルムは愛を忘れて、恍惚としてミニーオンのダンスを眺めて居つた。

舞が終つた時に足で以て卵を一所に集めて取残したものや碎れたもの

who was waiting with a violin ヴァキオリンを奏する人。
all his cares 胸の中で考へてる苦悶。

が一つとしてない其時に目蔽ひを外し少し腰を屈めて禮をした。
ウイルヘルムが面白い不思議な舞を見せて貰つた禮を述べて彼女を褒め
め嘸疲れただらふといわつてやつた。

で、彼女が室から出て行つた時にヴァキオリンを片手に提げた男の
人がウイルヘルムに曰く「彼女は私に舞蹈の音楽を教へて呉れる様に連
れて来たのです」と尙語をつぎて其月謝を幾何持つて来いと謂ふ様な
事までも謂ふた。

ミニオンとしては、ウイルヘルムを喜ばして其の心配を忘れさす種々
の方法が有つた、其れは歌を唄ふ事である、其の内彼が最も好む歌
は、彼が未だ嘗て聞いた事の無い言葉の歌であつて其の音楽も又奇妙
なものであつたが此れが又妙に彼れを喜ばしたのだ、だから度々之れ
をミニオンに歌はしたもので、彼れは又此の言葉を記るし然し言葉
よりも調子が一段よいのだ、其の歌は始めは斯うである。

hopod that she had not tired ... 疲れたるしなき優しくいたわる事。

「黄金色した千々の真球が、

緑の葉陰になる國は、

シヨンガイナ。」

曾て此歌を唄ひ終つた時に彼女は再び「其國の何所だか御存じなの
？」と問ふた、でウイルヘルムが「其れやイタリーさ、お前、伊太利
に居た事があるのかね？」と云ふと少女は返事をしなかつた。

新フエマス物語終

文學士 中村茂先生譯

本書は英文學に造詣深き中村文學士が多年教鞭を取られたる經驗に基き目下教科書又參考書として學生界に愛読せらる「アッソングラッセーフロント」の註釋書として完璧なる者世に無之を慨し新に譯述せられたる者にて譯文は流暢平易註釋

最新刊

註 譯 **アッソングラッセーフロント**

は親切丁寧を極め尙難句難語文法上に就ても適切なる詳解を附し以て専ら讀者に裨益せん事を期したり故に如何なる初學者と雖も一度本書を繰れば直に原書の意味を解するを得實に英語研究者には必要缺く可からざる一大良書なり

全壹冊

洋裝四六版
定價五拾五錢
郵稅六錢

東京神田錦町丁八番地

派替口座東京九貳參參番

太田夢雲氏著

本書は情及愛に關する古今東西著名の俚言格言數百種を集め是を英和對譯に附したる者にて全章凡れも皆世上人心の

英和對譯 **戀の格言**

機微を穿ち正に男女の一讀すべき良書たる而已ならず英語を研究せんとする學生諸君にも無二の良參考書なり

袖珍裝釘優美高尚
定價貳拾五錢(郵稅共)

發兌元 日進堂書店

(1)

明治四十二年八月二十五日印刷
 明治四十二年八月二十八日發行

不許複製

—(新譯フラス物語)—

正價金參拾五錢

著者 織戸正滿
 譯者 鶴岡五郎
 發行所 松澤紅三
 印刷所 同 勞 舍

滿地 一十一番 天町
 正 一八番 錦町
 五 一七番 下六番
 紅 一七番 下六番
 三 一七番 下六番
 舍 一七番 下六番
 (電話番町三六九番)

發兌元
 發賣所
 發賣所

日進堂書店
 東京市神田區錦町三丁目八番地
 振替口座(東京壹九貳參參番)
 文華堂書店
 東京市神田區北神保町一丁目
 振替口座(東京參七貳壹番)
 東京堂書店
 東京市神田區表神保町

自問自答 算術問題通解

全壹冊 四六版 總スロク金文入
 紙數七頁 正價壹圓廿錢 郵稅錢

元京都理科大学講師
 中央城大學教授
 根津千治先生編

根津千治先生編 (近下印刷中)

本書は専ら中等教育界及受験界に於て學生諸君の知らざる可からざる算術難解問題を集め是に周到懇切なる解釋を附したる者にて現今一般世は行はる、算術教科書の問題は解題共本書を一讀せば自ら了解すべし殊に藤澤氏算術小教科書、高木氏、林氏、長澤氏、寺尾氏、三輪氏、澤田氏、眞野氏、權氏等の算術教科書の解としては本書巻頭の索引と教科書の問題番號とを對照せば一目瞭然たるべし

發兌元 日進堂書店 東京市神田區錦町三丁目八番地

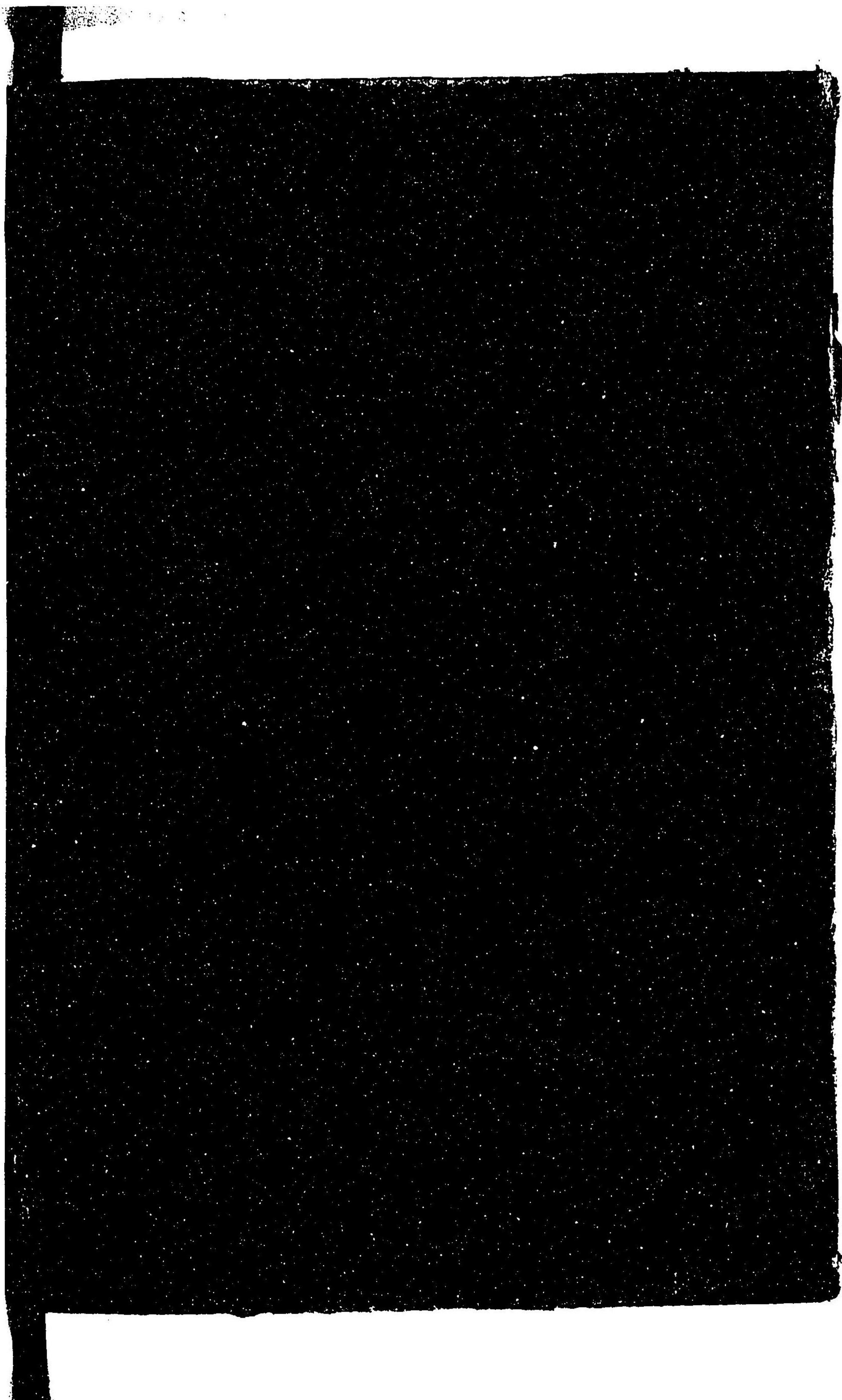
大賣捌所

東京神田表神保町武藏屋書店 (.....)
 全日本橋數寄屋町林平書店 (振替口座二三七一番)
 大阪市東區備後町吉岡寶文館 (振替口座大阪西三番)
 名古屋市西區本町川瀨代助 (振替口座五八〇一番)
 久留米市米屋町菊竹金文堂 (振替口座五二九三番)

賣捌所

東京	神田	中	西省	屋	東京	京橋	三	松	堂	廣島市	積善館支店
同	同	三	勉	堂	同	本	日	本	堂	同	友田書店
同	同	勉	強	館	同	同	東	亞	閣	山口市	白銀日新堂
同	同	崇	文	閣	同	芝	有	終	店	下ノ關	上山文英堂
同	同	有	斐	館	同	同	岸	田	支	福岡市	積善館支店
同	同	光	風	房	同	同	福	島	店	熊本市	金書堂
同	同	富	山	店	同	同	同	同	支	同	長崎次郎
同	同	門	部	堂	同	同	同	同	店	同	谷村書兵衛
同	同	二	武	屋	同	同	同	同	堂	同	宇都宮書店
同	同	武	藏	堂	同	同	同	同	堂	同	燠乎堂
同	同	益	文	堂	同	同	同	同	堂	同	水琴堂
同	同	丸	善	店	同	同	同	同	店	同	目黒書店
同	同	大	倉	店	同	同	同	同	店	同	北光社
同	同	文	林	堂	同	同	同	同	屋	同	英華堂
同	同	太	洋	堂	同	同	同	同	野	同	藤崎書仙助
同	同	至	誠	堂	同	同	同	同	店	同	佐々木書店
同	同	文	星	堂	同	同	同	同	屋	同	成今泉本店
同	同	北	隆	館	同	同	同	同	店	同	富貴堂
同	同	目	黒	店	同	同	同	同	潮	同	韓國京城日韓書房
同	同	東	海	堂	同	同	同	同	支	同	瀋國大連濱井書店
同	同	春	祥	堂	同	同	同	同	店	同	其他各國有名書林

72
170



32
420

101344-000-1

32-420

フェマス物語

ボールドウキン/著

M42

DBY-0676

